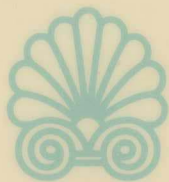


アテナイオス

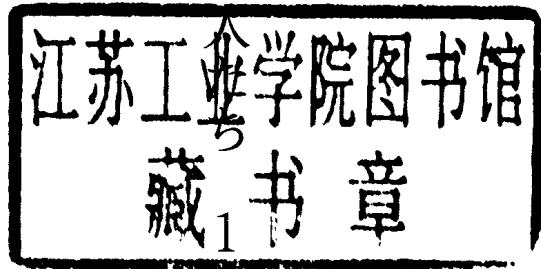
Ⅱ

食卓の賢人たち 1

柳沼 重剛 訳



アテナイオス
食卓の賢



西洋古典叢書

訳者略歴

柳沼重剛（やぎぬま しげたけ）

大妻女子大学教授・筑波大学名誉教授

一九二六年 東京都生まれ

一九四九年 京都大学文学部卒業

一九九二年 筑波大学教授を経て現職

主な著訳書

『ギリシア・ローマ古代知識人群像』（岩波書店）

『西洋古典こぼればなし』（岩波書店）

『語学者の散歩道』（研究社出版）

ブルタルコス『食卓談話集』（岩波文庫）

食卓の賢人たち¹ 西洋古典叢書 第Ⅰ期第3回配本

一九九七年八月二十五日 初版第一刷発行

訳者 柳沼重剛

発行者 尾崎芳治

発行所 京都大学学術出版会

606-01 京都市左京区吉田本町 京都大学構内

電話 〇七五七六一・六一八二

FAX 〇七五七六一・六一九〇

印刷・土山印刷／製本・兼文堂

© Shigerake Yaginuma 1997, Printed in Japan.

ISBN4-87698-103-5

定価はカバーに表示してあります

凡 例

一、本書はアテナイオス『食卓の賢人たち』(Athenaios, *Deipnosophistai*) 全十五巻の全訳である。

(1) ただし、第一巻、第二巻の全部と第三巻のはじめの部分は散逸しているので、この部分は後世の人の手になる「要約」を訳してある(「解説」参照)。

(2) G・カイベルによるタイプナー版(Leipzig, 1887-1890)を底本とし、C・B・ガリックによるロウプ版(London/Cambridge, Massachusetts, 1927-1941)を随時参照し、第一、第二巻についてはA・M・デルソー／C・アストリユクによるビュデ版(Paris, 1936)も参照した。

(3) 本訳では、原著を三巻ずつに分割して全五巻とする。

二、訳文の欄外上部に記してある数字とアルファベットは、本書の伝統的な頁づけであり、アテナイオスの引用はすべてこれによって行なわれるので、本訳でもそれを記した。

三、本文中「』」は書名を、「『』」はそれぞれ引用文中の会話と引用等を表わし、また「」でくるんで小さい字で書いてあるのは、訳者による補訳である。

四、本書全体を通して、訳註の中で「辞書」とあるのは、とくに断わらないかぎり、H.G. Liddell and R. Scott, *Greek-English Lexicon*, 9th ed. (Oxford, 1940) + P.G.W. Glare, *Revised Supplement* (Oxford, 1996) のことである。

五、目次と本文中の見出しは、読者の便をはかって訳者がつけたものである。

六、すべての引用文について、適宜その出典を註として示したが、作品名のみ示してあつて箇所
が明示されていないのは、その出典の作品が断片であることを示している（言い換えれば、断片
については、原則として断片番号は記してない）。

七、それが必要または、ある方が便利と考えられる場合には本文中に（ ）をつけ、ギリシア語
の綴りをローマ字化して原語を示した。

八、最終卷（『食卓の賢人たち』）末に、人名・地名、事項、出典の各索引を付録として掲載す
る。

目次

第一卷 △要約▽

3

序 列席者の紹介(4) 序 ラレンシス讃(8) 気前のよさは裕福な人のつとめであること(11) 食道楽と教養(14) ピロクセノス(19) もうひとりのピロクセノス(24) アピキウス(26) ミュコノス人の貧しさと不評・押しかけ客(28) 節制(32) 飲酒(36) 三度の食事(40) 卓の置き方(42) 取り分け(44) 歌舞音曲(50) 毬わざ、舞踏(51) 笛(56) 献酒(57) 豪邸(58) ペネロペ遊び(59) 香りと寝台(60) 尿瓶(61) 英雄たちの分別ある生き方(62) 愚かしい贅沢(64) いろいろな芸人たち(67) 世界の都市ローマ(70) 舞踊(71) 着物の着付け、歩き方など(73) アイスキュロスの劇の合唱隊の踊り(75) ふたたび舞踊について(77) ムセイオン(78) 飲食に関するいくつかの語彙(81) 疲労回復法(83) 英雄と野菜・魚・鳥など(87) 古い酒(90) イタリア各地の葡萄酒(92) ギリシア各地の葡萄酒、および特産品(93) 島々の葡萄酒(100) 椰子酒(105) このほかの各地の酒(106) 一風変わった酒各種(108) 神託(113) 香料入りの酒(115) 葡萄酒と栄養・健康(117) エジプトの葡萄酒(120) 酔いざめのキャベツ(122)

葡萄酒をギリシア語で *oinos* と呼ぶ理由 (126) 葉としての酒 (128) 適量、度を過ごした酒 (129) 酒と人間の年齢 (133) 酒讃歌 (135) 「三段槽船」と呼ばれる家——酔いの果ての狂気 (136) 酒と真実 (137) 葡萄酒を水割りにして飲むことの起源 (139) 酔って獣と化すこと (140) ネクトル (140) 酒と詩人 (142) 精神を高揚させる酒、精神を鈍らせる酒 (143) 酒と神事 (146) 水——序 (148) ホメロスに語られた水 (149) さまざまな天然の水 (151) 特異な泉 (155) 酒を飲む人、水を飲む人 (158) 水しか飲まなかった人々 (159) 特別な水 (162) 食前の水、飲む前の水 (163) カルマノイ人の奇習 (164) よい水、悪い水 (165) 水・乳・蜂蜜の栄養 (166) 要約者の書き込み (167) 喜劇に見られる食事に関する稀語 (168) 宴席の寝椅子の数 (171) 寝椅子・寝台の掛け布 (172) 三脚の卓 (175) ダマスコス李 (177) 桜桃 (180) 桑の実 (183) 胡桃 (185) アーモンド (186) ひよこ豆 (192) ルピナス (196) ささげ (198) オリーヴ (198) 二十日大根 (200) 松の実 (202) 卵 (203) 食前酒 (206) ぜにあおい (207) 西洋南瓜 (209) 茸類 (214) 水芹 (218) 松露 (220) 刺草 (222) アスパラゴス (223) 蝸牛 (224) ボルボス (227) 鵜 (231) いちじく (232) 花鶏 (234) 黒鵜 (235) 棕鳥 (236) 雀 (236) 豚の脳 (238) 胡椒 (240) オリーヴ油 (242) 魚ベースト (244) 酢 (245) ペポン (250) ちしや (252) 薊 (256) カクトス (258) 棗椰子の脳 (262)

エジプト豆の実⁽²⁶⁶⁾ 胡瓜⁽²⁶⁹⁾ 無花果⁽²⁷²⁾ 林檎⁽²⁸⁸⁾ キュドニア林檎⁽²⁹⁰⁾
 ふたたび林檎⁽²⁹¹⁾ ペルシア林檎⁽²⁹⁴⁾ シトロ⁽²⁹⁴⁾ 貝類⁽³⁰⁰⁾ 雲丹⁽³¹⁵⁾
 主に牡蠣のこと⁽³¹⁷⁾ インドの牡蠣——真珠⁽³²²⁾ 水煮の肉類⁽³²⁴⁾ 子宮——
 ウルピアヌスとキュヌルコスの喧嘩⁽³³⁴⁾ あらためて子宮⁽³⁴⁵⁾ 料理・食事の
 哲学⁽³⁵⁰⁾ 大海老⁽³⁵⁸⁾ 小海老⁽³⁶¹⁾ 網膜⁽³⁶⁵⁾ 揚げ物用の小魚⁽³⁷⁰⁾ パン
⁽³⁷³⁾ 炙り焼きのパン⁽³⁷⁵⁾ アタビユリテス⁽³⁷⁶⁾ アカイネ⁽³⁷⁷⁾ 塩漬け魚
⁽³⁹⁶⁾ 水⁽⁴¹³⁾ 碾き割り麦⁽⁴²⁶⁾

解説

食卓の賢人たち

1

柳 沼 重 剛 訳

第

一

卷

△要約▽

序 列席者の紹介

- 1 本書の生みの親はアテナイオス。彼の友人ティモクラテス宛てに書いている。『食卓の賢人たち』と題し、記すところは、運に恵まれてその名を知られたローマの市民ラレンシスが、自宅において宴を催し、それへあらゆる分野の、教養ある人々を招いた折のありさま。その列席者⁽¹⁾たちが発したすばらしい言葉の、一言半句すべて残らず、ここに記されている。されば本書は、魚に関することども、その利用法、その名の由来、ありとあらゆる野菜、またあらゆる動物、歴史家に詩人に哲学者、楽器、無数の種類の冗談等々、すべてを含み、なおかつ、さまざま酒器、王たちの富、船の大きさ、そのほか思い出すさえ容易でない、とはすなわち、いちいち挙げつらねようならば一日では足りぬことどもが記されている。また本書の構成は、贅を尽くした宴の次第を模し、各巻の配列は、出された料理の順に従う。このこよなき言葉の饗宴を取り仕切る驚嘆すべきアテナイオスは、おのれの力量をさえうちしので、アテナイの弁論家さながらに、熱の込めるにまかせて、巻また巻と筆を進める。さてこの宴に連なつた賢人たちはと申せば、これぞまこと、立法家のマンスリウス⁽²⁾「マスリウス」。この人は列席者中ただひとりの詩人。しかし、ありとある教養に真剣に心を向け、
- b
- c

詩のほかにおいても何びとにもひけをとらず、教養一般あまねく身につけることを志していた。何事について意見を述べても、それこそがこの人の専門かと聞こえるほどに、この人が少年のころより積み重ねた教養は万般にわたっていた。アテナイオスによれば、イアンボス詩人⁽³⁾としては、アルキロコス以後彼の右に出る者はないという。このほかにプルタルコス、エリスの人レオニデス、アイミリアヌス・マウルス、言語・文学の教師中、雅びの心得においては一、二を争うゾイロスも一座に加わった。哲学者ではニコメディアのポソテティアヌス、同じくニコメディアのデモクリトスがいたが、この両者は、その博学多識においてだれをもしのいでおった。またプロレマイスのピラデルポスは、若いころから哲学的思弁に養われてきたのみならず、人生百般、何事にも検分のまなざしを向けた。犬儒派のひとりには「キュヌルコス〔犬使い〕」とあだ名されておったが、彼に従う犬どもは、集会へ向かうテレマコスに「二匹のすばしい犬⁽⁴⁾」がついて来たなどは比べるもおろかなりで、アクタイオンの率いる犬の群れよりもなお多かった。弁論家たちも犬儒派諸公に負けず

(1) 個々の列席者については「解説」を参照されたい。

(2) この人の名はここでのみマンスリウス、ほかではマスリウス。二・dではマッサリウスとなっている。

(3) イアンボスは本来韻律の名で、例えば悲劇や喜劇のせりふはこの韻律で書かれている。しかしこの韻律を使って最初に有名になったのは、すぐあとに挙げられているアルキロコス

(前七世紀)で、彼の詩には風刺的気風が溢れていた。政治

家にして賢人の誉れ高いソロンも多くのイアンボス詩を遺しているが、彼の詩の多くは政治的教訓を内容としている。悲劇のせりふと風刺と教訓では、あまりにも趣が違いすぎるように思われようが、総じて、純粹な叙情というよりは、散文でも書こうと思えば書ける内容を歌った詩だとは言えるかもしれない。

(4) ホメロス「オデュッセイア」第二歌一一。

劣らず大勢いたが、この犬儒派連中に、テュロスの人ウルピアヌスがことさら激しく襲いかかった。この人は、街路、遊歩道、本屋の店先あるいは浴場等で、時を選ばず探究に励んだがために、「ケイトウケイトス『有り無しさん』とあだ名を奉られ、この名の方が本名よりよく体を表わしていた。彼は独自の掟をもっていて、と申すのは、何を食するにも、そのものが「有りや無しや」、すなわち、文献に出ておるかおらぬかを問うまでは一切口にしない御仁ごじんであった。例えば「季節」を意味する *hora* というギリシア語が、一日の部分を指す名として用いられた例があるか、あるいはまた、ふつうは女が酔っているのを表わす *methysos* という語が、男が酔っているのを表わしている用例があるか、「子宮」を意味する *metra* が、食品名として使われている例があるか、*syngros* なる合成語が *sys* [猪] の意で用いられている例があるか、等々といった按配であった。医者で宴に連なつたのはエペソスのダプノス、この人の医術は神技のごとく、人品もまた神のごとくであったほかに、アカデメイア派の哲学を理解する点でも一方ならぬものがあつた。ペルガモンのガレノスは、哲学および医学に関して彼が公にした著作の数は、先輩のだれよりも多きに達し、昔の書物の解釈の点でも、古い時代の学者たちのだれにも劣りはしなかった。ニカイアのルフィヌスも来たし、アレクサンドレイアの楽人アルケイデスも来た。こう並べたてると、これは宴の客の名簿というよりは、軍の兵員名簿のようだとアテナイオスは言っている。

彼アテナイオスはこの著作を、プラトンにならって劇仕立てにしている。とにかく開巻最初の所はこういうのである。

「アテナイオス、近ごろ食卓の賢人などと呼ばれている人々が一堂に会したというので、今町中で評判に

なっている雅びな宴に、ご自身出席なさったのですか、それとも、どなたからお聞きになって、それをお仲間の方々に逐一お話しになっているのですか。「私も出席したのさ、ティモクラテス」。「それなら私たちにも、盃を傾けながらなさったその美しい会話のなにがしかを、おすそ分けしていただきたいですね。キュレネの詩人エラトステネスもどこかで申しておりますでしょう、

三たび口を拭う者⁽⁶⁾には、神々はよきものを賜う

(1) Hora といえば英語の "hour" の語源だが、ギリシア語での本来の意味は「季節」を意味していた。これを hour の意味に使った例もけっこう古くからあるが、盛んにこの意味で用いられるようになったのは、前五世紀以後である。

(2) 意外なようだが、この語は本来女が酔っているのを表わす形容詞だった。しかし本書にもしばしば引用されるメナンドロスの喜劇などでは、男が酔っているのを表わすのにもよく使われるようになっていく。

(3) Metra はたしかに「子宮」のことだが、人がこれを珍味として食べるようになれば、当然食品名にもなる。それが文献に現われるようになったのは、どうやら前五世紀の喜劇の中のことらしい。

(4) Syagros とは sys (猪) + agros (野生の) が一語となったも

のにすぎず、したがって、syagros から形容詞部分 agros が落ちて sys だけで「猪」を意味するようになるのは当然である。

(5) 前三世紀の学者（なぜかアテナイオスは「詩人」と言っている）。有名なアレクサンドレイアの図書館長をつとめるなどした文献学者だが哲学も学び、その方面の著作もある。

(6) これは断片で前後関係がわからないし、「拭う」という動詞も目的語をとっているわけではなく、ただ中動相になっているだけなので、拭ったのが手だか口だかはわからない。

「三たび」というのは、日本と同じように、三という数が「切りがいい」あるいは「縁起がいい」から「三たび」と言ったままで、要するに「繰り返し」「何度か」ということであらう。

b とね。それとも、そんなことはだれかほかの者から聞けとおっしゃいますか」。

序 ラレンシス讃

ややあつて、アテナイオスはラレンシス称讃の辞を述べはじめる。彼は教養の高い人々を集めることを誇りとし、宴を催し言葉をもつてもてなした。時には探究に値する論題を提供し、時には自身が知り得たことを開陳する。しかもいずれの場合も前もって十分に調べつくし、決してその場で急に思いついて質問するなどということとはしない。批判的、ソクラテスの洞察をもつて語るので、同席する者は皆、鋭い目の行き届かぬ所とてない彼の探究ぶりに驚嘆した。ラレンシスはまた、世にもすぐれた皇帝マルクス「アウレリウス」によつて、神殿および犠牲式いけにえの神事を司る役に任じられ、ローマのみならずギリシアの祭事をも司つたと、アテナイオスは言っている。彼はラレンシスのことをアステロパイオスと呼んでいるが、それは、二本の槍を使つたというアステロパイオス(1)のように、ラレンシスがほかに抜きん出て、ギリシア語・ラテン語を能くしたからである。彼はまた、ローマの名祖となつたロムルスおよびポンピリウス・ヌマ(2)によつて制定された神事にも通曉し、政治上の諸制度にも明るかつた。しかもこれらすべてのことを、彼は、今日ではもはや教える人もいなくなつた昔の議決事項の記録や法令集から、自分ひとりで学んだのである。これらの掟・法規は、エウポリスが喜劇の中でピンダロスの詩のことを、「大方の好みが変わつたゆえに沈黙を強いられた」詩だと評した、あれと同じような処遇を受けていたのであつた。また彼は、古いギリシアの書物を集め、そ

の数おびただしきに達して、驚くべき数の蔵書をもつと世に知られたすべての人々——例えばサモスの僭主ポリュクラテス⁽³⁾、アテナイの僭主ペイシストラトス⁽⁴⁾、同じくアテナイのエウクレイデス⁽⁵⁾、キュプロスのニコクラテス⁽⁶⁾、さらにはベルガモンの王たち⁽⁷⁾、悲劇作家エウリピデス、哲学者アリストテレス、その弟子テオプ

(1) ホメロスの『イリアス』にトロイア軍の味方として登場し、

最後はアキレウスに殺される人物。アカイア(ギリシア)軍・トロイア軍を通じていちばん背が高かったという。

(2) ロムルスの跡を継いで第二代のローマ王となったという伝説的な人物。彼の治世はのちに理想化され、ローマの黄金時代であったとされた。プルタルコスはいわゆる「英雄伝」に彼の伝記がある。

(3) ヘロドトス『歴史』第三巻四〇・四三が紹介している伝説(あまり幸運に恵まれすぎるので、神のねたみを招きはしないかと恐れて、自分にとっていちばん大事な王の印璽を海中に捨てたが、漁師が彼に献上した魚の腹にそれが入っていて不幸になりそこなった)で有名。この伝説が暗示するように、最期は悲惨なものだったが、節操よりは利益を重んじて勢力を張ったことは事実で、方々に美しい建物を建てたほかに、詩人アナクレオンやイビュコスのパトロンでもあった。

(4) すべての勢力家(とくに僭主)がそうであるように、彼の

業績も功罪相半ばする。功の方のみ言えば、アテナイという都市を美しくした、他国の詩人たちをアテナイに招いた、パナテナイアの祭りでホメロスの詩の吟誦の競演を始めた、大ディオニュシア祭を創始した、等々のことがある。

(5) 前五世紀末のアテナイの執政官。その在任中に、以前フェニキアから導入されたアルファベットに改良が加えられた。

(6) ここに名が挙げられている以外には、まったく不明の人物。
(7) 「ベルガモンの王たち」とはアッタロス一族のこと。ベルガモンは前三世紀にアッタロスがここに都を定めて、アレクサンドロスの大帝国の一部を領有して以来、アレクサンドリアに拮抗する勢力となった。とくにここに建設された図書館は有名であり、また、書物の材料としてパピルスに代わって羊皮紙を使いはじめするなど、文芸の中心地として果たした役割も大きい。